



雑草イネが発生した水田における防除体系 早い発見と迅速な対策が重要になります

近年、県内の水田で、雑草のヒエなどとは違うが、栽培イネとも少し特徴が異なる「雑草イネ」が広がりつつあります。これら雑草イネの防除対策を、令和4年度 茨城県「農作物雑草防除指針」などから抜粋して紹介します。

<雑草イネとは>

雑草イネは、脱粒性が高く、こぼれた種子が水田で越冬して世代交代を繰り返すイネです。赤米であることが多いため、栽培イネに紛れて生育することで収量低下や収穫物への混入被害をもたらします。雑草イネの形態的特徴は一律ではなく、草姿、出穂期、芒（のげ）・ふ先色の有無、籾・玄米の色調は様々です。栽培イネと同じ植物種であるため、水稲用除草剤のみによる防除はなかなか困難ですが、下記を参考に防除を行うことが効果的です。

<雑草イネ発生の問題点>

- 1 発生の発見が遅れて放置すると、3~4年で多発生状況になり、減収被害を招いてしまった事例があります。
- 2 農産物検査で、雑草イネの玄米が混じっていれば、着色粒として扱われ、混入率が0.1%を上回ると2等に格下げられます。また、異品種混入とみなされて、品種銘柄表示ができなくなります。
- 3 対策を怠り、農業機械を介して拡散すると、地域全体の水稻生産に大きな被害をもたらします。
- 4 混入した玄米を色彩選別機で取り除ける雑草イネもありますが、(収穫前のモミの脱粒で、種子が水田に落ち)水田から雑草イネが減るわけではありません。

<主要な防除体系>

- 1 侵入初期の極少発生の場合は、モミが脱粒する前（出穂後2週間以内）に株ごと抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分します。
- 2 既に圃場にまん延してしまった場合は、以下を参考に、継続的に3年程度の防除体系が必要になります。
 - 1) 雑草イネの出芽がほぼ揃う5月下旬以降に代かきを行い、物理的に枯殺させてから遅植えすることが最も重要です。
 - 2) 移植当日~翌日に初期剤を処理し、その後、7~10日おきに一発処理剤および中期剤を処理する3剤使用体系の防除が有効で、薬剤の切れ目をなくして遅発個体を枯殺します。
なお、本県で雑草イネへの効果が認められている除草剤の組み合わせ事例（初期剤と一発処理剤は、この中から一剤を選んでください）として下記があります。

(令和4年4月 日現在)

[初期剤] (有効な時期)		[一発処理剤] (有効な時期)		[中・後期剤] (有効な時期)	
エリジャン乳剤	雑草イネ発生前	エーワン1キロ粒剤	雑草イネ発生前	ナイスミドル 1キロ粒剤	雑草イネ発生前 ~始(籾葉抽出期)
デルカット乳剤		カウントダウン1キロ粒剤			
メテオフロアブル	雑草イネ発生前 ~始(籾葉抽出期)	ジェイフレンドフロアブル	雑草イネ発生前~ 始(籾葉抽出期)		
メテオ1キロ粒剤		シリウスエグザ1キロ粒剤			
		ボデーガード1キロ粒剤			
		クミスター1キロ粒剤51			

※ 雑草イネの農薬登録上の適用草種は「水田一年生雑草」ですが、雑草イネに有効な使用時期の多くは「雑草イネ発生前まで」なので注意してください。

※ これら以外の有効な除草剤については、日本植物調節剤研究協会のホームページ（技術情報の項）を参照するか、各農業改良普及センター（農林事務所・経営普及部門）などに問い合わせてください。

- 3) 上記1)、2)の対策を行っても取りこぼした雑草イネは、脱粒が始まる前（出穂後2週間以内）までに手取り除草を行って、出来るだけ駆除します。
- 4) 既に発生を確認している雑草イネと比較して、稈長や出穂期に差がある栽培品種を作付しておく、区別が容易にでき、抜き取りが比較的効率になります。
- 5) 水稻の収穫後は、秋の耕起を行わず、「雑草イネ」の種子を表層にとどめて越冬させると、低温による死滅や鳥による摂食の効果が期待できます（ただし、縞葉枯病が発生している圃場では、防除対策として、ヒコバエの早期な耕起が必要になります）。
- 6) ダイズやソバ等の作物に転換し、耕起や攪拌による物理的な枯殺、イネ科雑草に効果のある除草剤の処理を行うことにより、雑草イネの発生が抑制されます。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。